

【優秀賞】

ゴム風船

松井路美（大阪府 大阪教育大学附属平野中学校 3年生）

「おかあさん、ふうせんほしい。」

母と買い物に行った際、私はよくそう言って母にゴム風船をねだった。もう十年以上も前であるため、何が切っ掛けかまでは覚えていないが、小学一年生の頃の私は、ゴム風船で遊ぶことに嵌まっていた。初めは暗色で皺くちゃだったゴムの塊が、ぷうっと息を吹き込むと、若返るように、透き通った美しい姿へ変化する。さらに、一度投げ上げると、風を受けてゆらゆらりと名残惜しそうに落ちてくる。あの頃の私には、妖精のようなその姿が、幻夢的で新鮮なものに見えたのだろう。

最近、母と風船で遊んだ幼い頃の記憶が、何故か頻繁に頭に浮かんでくるようになった。母が日に日に母でなくなっていく現実の世界から、無意識に逃げようとしているのかもしれない。

母が認知症と診断されたのは、一年程前のことだった。物忘れが生活に支障を来すまでに酷くなったり、知らぬ間にふらふらと外へ出ていくこともしばしばあった。だが、そんなことは私にとって苦痛ではなかった。「忘れっぽいなあ」などと、努めて明朗に振舞う余裕もあった。それが無くなったのは、ついに母の性格すらも歪め始めた病の恐ろしさを垣間見た時だった。

その日、新入社員の人だった私は、上司から「新入社員歓迎会を今夜開いても良いか」と尋ねられた。他の社員の都合は合うらしく、私だけが無下に断る訳にもいかなかった。

「大丈夫？お母さん今一人でいるの？」

事情を話したところのある同僚が心配してそう尋ねてきた。だが、普段会社にいる間だけ雇っている介護士に連絡をして、泊まりで介護を頼んだので、問題は無いと伝えた。勿論、不安が無かったと言えは嘘になる。しかし、何しろ、会社の人間と勤務後に飲み会をする事自体が初めてで、介護士の都合がついたこの好機を逃したくないという思いもどこかにあった。しかし、母を放って朝まで飲み明かす訳にはいかないことも承知していて、ちゃんと終電には間に合うように歓楽街を出た。

電車で揺られながら、ほんのり酔った頭で母の事を考えた。

もう遅いから眠りについただろうか。今日の飲み会であったことは明日話そう。同僚のいずみちゃんが転んだ話をしたらきつと笑うだろうな。明日は会社が休みだから、時間を掛けてたっぷり話そう。

酔いもあつてか、浮ついた状態で、子供のようには母と話す話題に思いを馳せながら帰路を歩いた。母への土産の大福と、不足していたことを思い出して駅前のスーパーで買った牛乳を両手にぶら下げていたあの時は、まさかこれから酷な現実を見ることになるとは、思ってもいなかった。

玄関の鍵を鍵穴に差しこむと、扉の向こうから、微かにこちらに歩いてくる足音が聞こえた。母か介護士のどちらかがまだ起きていたのかと少々不思議に思ったが、私の帰宅を待ってくれていたのだろうと、大福の袋を渡し易いように持ち直してから扉を開けた。

「ただいま」

「葵。」

出迎えてくれたのは母だった。だが、私の名を呼ぶ母の口調と表情は険しく、殺伐とした雰囲気すら含んでいた。

「こんな時間まで出歩くなんて馬鹿じゃないの。そんなに私の顔を見たくなかったの。」

馬鹿じゃないの、などという言葉を母から言われたことは初めてで、言われた理由も母が怒る訳も分からず、頭の中の酔いが足の先からすつと流れ出ていくような感覚に囚われた。

「すみません。お電話頂いた直後、話したときは納得されていたのですが、先程急にこのように怒り出されました。」

状況を説きつつ、台所から出てきた介護士の頭に、何か滑りのようなものがついているのが見えた。薄暗い玄関で瞳を凝らすと、どうやらそれは生卵であるらしかった。

「私の事がそんなに嫌いかって訊いてるの。」

「…違う。そんな訳無いでしょう。」

電車の中で想像していた母の笑顔と笑い声が、私の頭の中でぷしゅつと音をたてて皺くちゃに萎んだ。

病状が悪化するに連れて、情緒が不安定になっていく可能性があると、医師からの説明は受けていた。覚悟もしたはずだった。幼い頃に両親は離婚し、父がいないのは当たり前前の生活だった。一人で私を育ててくれた母がどうなるうが、母は母だと思っていた。

しかし、金切り声を上げて喚く目の前の女が、どんなにつまらない話も、頬に微笑を湛え、頷きながら聞いてくれる母と同じだとは認めたくなかった。認めれば、私の思い出の中の母が全て違う色に塗り変えられてしまう気がしたからだ。

耳鳴りがして、女の姿が母の仮面を被った蟒蛇うわばみに見えた。その体の左右から伸びた手が私の手から牛乳の入った袋を奪い取った。

「止めて。落ち着いて下さい。」

蟒蛇を介護士が抱きしめるように押さえつけているのを見て、頭の生卵は、そうして押さえた時、抵抗した相手に投げられた物かと妙に冷静に理解した。それと同時に、奪われた牛乳が、袋ごと私に投げつけられた。私の思い出の中の母が萎むぶしゅつという音と、肩に牛乳が当たる鈍い音が一緒に轟いた。

翌朝、目を覚ますと、まず初めに悪夢を見たのだと思った。しかし肩に感じた冷たい感触の正体が氷囊ひょうのうであることに気付いて、前夜感じた肩の痛みが現実であることを思い知った。そして徐々に気が鬱していった。

母が痲癩を起す所など、それまで私は見たことが無かった。しかもそれは私に向けられたものであり、私が母をあんな恐ろしい姿にしたのだ。私が病を軽んじて呑気にお酒を飲んでる間にも、病は私の知っている母を着実に喰い進めていたのだ。しかも、私がそれに気付き、恐慌した所で事態の悪化は止められない。母の所へ行って思い切り抱きしめても、母は私の腕の中で病に喰われ続ける。

その時初めて、本当にどうにもならない事が、この世には存在するということを私は痛感した。

母はその後、度々痲癩を起すことがあった。処方された薬を飲ませても、効果はあまり芳しくなかった。寧ろ、時が経つにつれてその頻度は上がっていつに思えるようになってしまった。

今朝も母は、何年も前に壊れて捨てたはずの扇風機を「昨日ま

であったのに」と怒って茶碗を一つ割った。私が母の日にあげた赤いカーネーションの絵が描かれたものだった。

こうして母が物を壊したり、私を罵ったりする度に、母との思い出がぶしゅっと萎む。落ちていている時の母は昔と変わらぬ母だが、まさか母の病氣のことを母に相談する訳にもいかず、昔のように話をきいてもらえないことが辛くて仕方が無かった。

「葵、ちょっと来て。」

朝に茶碗を割ってからは機嫌を損ねることもなく、穏やかだった母親が、空が赤くなり始める頃、慌てた声で私を呼んだ。何事かと思い、母のいる縁側へ行くと、母が空を指差しながら、こちらに向かって手招きをしていた。

「何があるの。」

「風船よ。風船。」

想像以上の夕日の明るさに目を細めながら母の指の先をよく見ると、空と同じ位真っ赤な色をしたゴム風船が、下に垂れた紐を揺らしながら昇っていく所だった。

「葵は小さい頃風船が大好きだったのよ。」

「…知ってる。覚えてるよ。」

そう答えると、母が驚いたように私を見た。だが、私からすると、母が覚えていたことに驚きだった。

「じゃあ、どうして好きになつたかは覚えてる？」

首を捻る私を見て、母はふふふつと含み笑いをした。白髪が増えて、腰も随分と曲がってしまった母だったが、口を微かに窄めて笑う笑い方からは、ちゃんと昔と同じ母の香りがした。

「葵が小学校に入つてすぐの時にね、近所でサーカス団の公演があったの。私も少し興味があって、あなたを連れて見に行つたのよ。」

知らなかった。サーカスの公演なんて今まで見たことが無いと思っていたし、私の住んでいる所にサーカス団が来ていたというのも初耳だった。

「火の輪くぐりとか、空中ブランコとか、色々あったけど、何故かあなたは沢山のボールを使ったお手玉が一番気に入ったわ。一番簡単そうな技だったけれど、確かに色とりどりのボールが宙を舞っていて、すごく綺麗だったわ。」

私は一瞬、母の病が治ったのではないかと思った。機嫌が良い時でも、一日のほとんどはぼうつとどこか遠くを見て過ごしていたのに、今の母は、瞳に光が宿っていて、どこか楽し気だった。「あなたはその技を真似しようとして家にあつたこれくらいのボールで練習し始めたの。」

そう言いながら、両手の人差し指と親指を同じ指同士でくっつけて、丸を作ってみせた。

「でもやっぱりサーカスの技の中じゃ簡単でも、難しいことに変わりはないでしょう？あなたも出来ないことが分かって泣きだしちゃってね。丁度今くらいの時間だったから。ちっとも泣き止まなくて、困ってたの。けどそうだ、風船だったら軽いからできるんじゃないかって思って、近くの雑貨屋さんで買ってきたの。そこから撤まつちゃつたみたいで、いつも家の中で色んな色の風船がいっぱいとんでたわ。」

母はまたふふつと笑った。

病に喰われてなんかいなかった。最近はまだ見なくなっていたけど、その笑顔はまぎれもなく母の笑顔だった。

もうすっかり空の色に溶けて見えなくなつてしまったあの風船は、もしかしたら誰かが手放してしまつたものかもしれない。手放した子は、届かない距離まで昇つていつてしまつた風船を見な

がら泣いているかもしれない。でもきつと数分後には、新しい風船を片手に笑っていることだろう。

母は今、私が無くした私の思い出を一つ新しく作り直して私にくれた。もしも母の中の思い出が全部空にとんでいってしまったら、今度は私が新しく作り直してあげよう。今この瞬間も、いつか母は忘れてしまうかもしれないけど、何度でも話してきかせれば良い。そうすればきつと、話している間だけでも昔と変わらぬ母娘として、一緒に生きて行けるはずだ。

「お母さん」

「何？」

「教えてくれてありがとう。私、その思い出絶対忘れないようにする。」

大袈裟だよと、母は苦笑した。

泣きたくなるほど不随意な世の中だが、溺れそうになれば、母と手を取り合って一緒に腕こう。強く生きていれば、きつと何とかなる。

並んで座る母娘を、沈みかけの夕日は、ただ悠然と照らしていた。